

## <小学生>

### 人の命の大切さ

第三小学校

5年

片岡賢佑

ぼくは、この作文を書くにあたり、前に、

「戦争でパラオに行った。」

と話していたひいおじいちゃんに、話を聞きに行ってみた。

ひいおじいちゃんは、92才。にん知しようになってしまい、今はグループホームにいる。戦争の話を知ろうと思ったのに、ひいおじいちゃんは、何も覚えていないようだった。すると、となりにすわっていた99才のおばあさんが、

「沼津丸焼け。」

「駅から千本浜が見わたせた。」

と、何度もくり返し言ってきた。

まさか、ぼくの住んでいる沼津が戦争のひ害にあっていたなんて、今までぼくは知らなかった。ぼくは、とてもびっくりした。

そこで、ぼくは、沼津の戦争のひ害について、調べてみた。

昭和20年1月9日の最初の空しゅうから計8回の空しゅうがあり、そのうち、7月17日未明の空しゅうは、「沼津大空しゅう」としようされ、2714人の死者、505人の重軽傷者という大きなひ害を出し、70機をこえる数の戦とう機から9000発以上の焼いだんが投下され、沼津市は市街地面積の89.5%を焼失したそうだと。

あのおばあさんが言っていたのは、この沼津大くうしゅうの時のことだと思う。70年以上たった今、しかも、にん知しようなのに、

「沼津丸焼け。」

「駅から千本浜が見わたせた。」

と、何度もくり返して言うほど、わすれられない出来事だったんだと思う。

ぼくは、戦争を知らない。これからの日本は、戦争を体験したお年寄り、どんどんいなくなり、ぼくのように戦争を体験していない人ばかりになっていく。

戦争はたくさんの人の命をうばうし、たとえ勝ったとしても、たくさんの人が死ぬ。

戦争はとても恐ろしい。どれだけ恐ろしいかは、体験した人にしか分から

ないけど、人の命の大切さは絶対にわすれてはいけないと思う。

人の命より大切な物なんて、この世にはないのだから。

---

## 祖父から伝え聞いたこと

第三小学校

5年

増田

孟

毎年8月になるとテレビでは、戦争のニュースが増える。広島、長崎では、原子爆弾が投下され、多くのひ害が出た。そして、生き残った人もひばく者として、がんやいろいろな後いしょうとたたかって生きていることをぼくは知っている。

ぼくは、祖父たちやその兄弟などに戦争の話を聞いたことがある。ひ害があったのは広島、長崎だけではなく。アメリカ軍による空しゅうでぼくたちの住む街、沼津のビルも家もあとかたもなくなったそう。海に面した沼津には海軍の研究しせつがあつてそこによくぼくだんが落とされたからだ。焼け出されたたくさんの人が、川ぞいを走ってにげてきたことを祖父ははっきりと覚えていることも教えてくれた。そしてひ害は祖父の家にまでも出た。ぼくだんの風で破へんが飛んできて家の屋根が割れ、小さなけがをしたこともあつたと聞いた。また、戦争によるひ害は戦争中だけではなく。戦後、浜に集められた不発だんで遊んでいた小学生が、とつ然のぼく発にまき込まれて亡くなったこともあつたらしい。

広島、長崎だけでなく、都会ではない小さな沼津の街でもひどい空しゅうにあつていて、その時のおそろしい体験や記おくは祖父たちの頭の中に今でもはっきりと残っている。日本各地でたくさん同じようなことがきつとあつたと思う。ぼくは、第二次世界大戦がなぜ始まつたのか、その理由はまだ勉強していない。きつとはじめは、「絶対勝つぞー。」という強い気持ちがあつたと思う。でも戦争中に人がたくさん亡くなつたり戦後70年以上たつた今でもひばくで苦労したりしている人がいる。結局全てよくない結果になつてるとぼくは思う。

日本は今、平和だとぼくは感じる。沼津が焼け野原になつたことも、この空をパイロットの顔が見えるくらいの高さで飛行機が飛んできてぼくだんを落としていつたこともうまく想像できない。けれども、外国はどうなのだろう。内戦が続いている国があつたり、となりの国とりょう地を争つて戦つていたりする国もある。これ以上争いを続けても、罪のない人たちの命がうばわれ続けるだけということは何れもが分かっている。それなのになぜ、みんながつらい思いをする戦争がなくなるならないのだろう。

ぼくは、武力でなにかを動かそうとしたり解決しようとしたり、りょう地をうばおうとしたりするから戦争がなくなるならないのだと思う。クラスでなにかを決める時や、友達とけんかした時、ぼくたちは話し合いをして、解決す

る。みんなの声を聞いて答えを出す。力でなにかを決めるのではなく、言葉でこうしようすることがいちばんいい方法だとぼくたちは知っている。第二次世界大戦では、沼津市内で8回の空襲があり、318人が亡くなって、重軽しょう者は631人だった。沼津から出せいで外国で亡くなった人は、2231人もいた。ぼくたちになにができるのかを考えなければならない。日本は世界でただ一つのひばく国だということをニュースで知り、戦争をなくすことをもっと強くうたえるために、まずはもっと戦争のことを知ろうと思った。第二次世界大戦はなぜ始まったのか。いろんなことを勉強してみたい。

---

## シエラレオネ共和国の11才

第三小学校

6年

麦島好美

シエラレオネは、平均じゅ命が最も短い国です。日本の平均じゅ命は、男性が78才、女性が85才です。シエラレオネでは日本とくらべてとても短く男性が32才、女性が35才です。この理由は、戦争です。シエラレオネでは、とても質のよいダイヤモンドを採くつすることができます。しかし、その利益は全て戦争にまわされ、いまだ国民の生活をゆたかにはしていないのです。

シエラレオネの戦争は、政府と反政府軍の間で起こったことで、アフガニスタンやイラクの戦争のように、大きな空爆や巨大な戦車などの高価な武器を使った戦いではなく、兵士一人一人が、ライフルなどの小さな武器を使って戦います。そして今シエラレオネ共和国では、日本でありえない事が起きていたのです。そのじゅうは大人だけでなく、子供もにぎっているのです。そんな子供兵士は、麻薬を体にうめこまれ、自分の感情（人にかける情）のない戦とうマシーンにされていました。そして罪のない多くの人をむいしきに傷付けているのです。

シエラレオネの政府は、戦争のためにお金をばく大に使っているのです。教育などにかかるお金もありません。私は、日本の11才でちゃんと学校に通っていますがシエラレオネの11才はじゅうを持ち、人を殺したり、学校に通えなかったりしているのだと分かりました。私が一番しょうげ的に思ったのは、アンプティの人です。アンプティの人たちは、手や足、耳など体のどこかが傷付いていました。アンプティ・キャンプには、反政府軍によって手足を切り落とされた人たちとその家族およそ2000人がくらしています。このキャンプは、フランスのNGO「国境なき医師団」と「ハンディキャップ・インターナショナル」などの、他の国にも助けられて成り立っています。手足を切り落とされた人の中には、3才くらいの女の子もいます。子供兵士は、おそった人たちを並ばせてじゅうをうち、作業技のように手や足を切ったそうです。

もしこの戦争でさい判を行ったら、国民はひ害者で、兵士は加害者ではなく、むりやり兵士にされたのでひ害者と等しいことになります。でも戦争は、

してはいけない悪い事です。変わってしまったシエラレオネ共和国。私に、あらためて戦争のこわさを感じさせてくれました。私はこの国の人々の苦しみを実際には感じられません。ただ話を聞いて、同情するくらいしかできません。けれども、フランスのようにシエラレオネを助ける国へ日本もなれると思います。私は11才で、あと九年で大人になります。その時にしっかりとした日本をつなげていきたいです。

---

## 自給自足の生活

第四小学校

6年

久保田 夏 美

昭和20年8月15日、第二次世界大戦は終戦をむかえました。

みなさんは「戦争」についてどんなイメージを持っていますか。かわいそう、大変だと思える人が多いかもしれません。私は戦時中、人々は、危険となり合わせでしたが、がんばって生きようとしていたと思います。また、この時代の人たちは、自給自足の名人だと思います。

昔、食料が少なく、配給制だった時、一家族8人くらいの大家族が多く、配給の食材だけで乗りきることが難しいことがありました。そんな時、できるだけ食料を増やそうとして、主婦たちは、いろいろな工夫をしました。例えば、道ばたに生えているタンポポなどの雑草をおひたしにしたり、みそ汁に入れたりして、お腹を満たしていました。また卵のからを、細かくすりつぶして、細かく切ったのりを入れ、ご飯にふりかけるとい食べ物もありました。この時は、カルシウム不足で栄養のためだけに食べていたため、味もせず、砂のような食感だったそうです。戦時中、命の危機を感じながらも、家族の命を守るために、食生活にもたくさんの工夫をしていたことを知り、現代の人とは、比べられないくらいの食の知識があったと思いました。

そんな工夫だらけの生活を送っていた時、原爆は、広島や長崎に落ちてきたのです。この時、何万人もの人がぎせいになりました。日々、家族のためにと家庭を守ってきた人たちの工夫や苦労も、ささやかな幸せも、一つの爆弾で、一瞬にして消し去られてしまいました。私は、同じ人間がやったこととは思えないくらい悲しくなりました。

このような時代と今とを比べてみると、世界がちがって見えました。今、食料は豊富で、食材が有り余り、捨ててしまうこともあります。私は、お店でご飯を食べたら、できるだけ残さないようにしています。でも、これほど食材があると、残してしまっても、まだたくさんあるから大丈夫だと思ってしまうものです。また、道ばたに生えているタンポポなどの雑草は、ただの雑草として、じゃまもの扱いされています。そして、卵のからは、卵を割った時に入ってしまったら、できるだけ早く取り出そうとします。しかし、昔は、そんなタンポポや卵のからも食べていたというのですから、すごいことです。

今では、テレビやスマホ、インターネットと、便利な暮らしを目指し、様々な物の開発が進められています。昔と今では、こんなにも暮らしが変わっているのです。

昔と比べ、現代の人は、自給自足ができていないことが分かります。たかが雑草、されど雑草。たかが卵のから、されど卵のから。自給自足の生活など、私たちにもできるのでしょうか。昔の人の知恵の素晴らしさを改めて感じ、自分にできることは何かと考えさせられました。

人々の小さいけれど尊い暮らしをこわしてしまう戦争。そんなものは、あってはならないことです。世界から戦争をなくすには、どうしたらよいのでしょうか。

---

## 青い空に……

開北小学校

5年

執行 哲平

朝、外で水まきをするお母さんについてぼくも外へ出た。いきなり、バタバタ、ゴーという音がしはじめて、その音がぐんぐんぼくの真上の方までやってきた。ぼくは心ぞうが、飛び出しそうなのをこらえて真上を見上げた。

向かいの家の角から真っ白い機体に赤と青の線が入ったドクターヘリがやってきた。ああよかった。ドクターヘリだ。と安心をした。

ドキドキしていた。本当はすごくこわかったから。なぜなら「私が子どものころ戦争があった」という本を読んだ次の日だったから。

空しゅうをさけて、そかいし、家族といっしょに住めない人。結こんしたばかりなのに戦争に行っただんなさん。戦争が終わったら、次の日からはみんな幸せにくらせると思っていたのに、そうではない生活がまっていた。

ぼくと同じくらいの年れいの子が道ばたでおにぎりを食べている子をじっと見ている。やせ細ったその子におにぎりをあげる人はいない。なぜならみんな食べ物なくてこまっていたから。そんな時代があったなんて、今ではとても信じられない。もしぼくが、その時のおなかですごくすいた子だったら、と思うととてもかわいそうに思った。

ぼくみたいな小学生や、もっと小さい子が戦争でちゃんと生き残ったのに。  
「ゴゴゴゴー」

という飛行機の音にビクビクしながら生活したり、食べる物にこまったり、親や家族を失って、住む家もなく、さみしく悲しい思いをするのは、戦争があったから。

もちろん、戦争に行った人も、食べ物や飲み物もなく、知らない国の野山をさまよい、自分が生き残るためには、人の命をうばわなければならない、そんなことが実際に起きていたということは、とてもおそろしいと思った。

73年前、今日と同じ晴れた空に、人々を攻めきし、町をはかいするためのばくだんを積んだ飛行機がうかんでいたなんて、とてもこわい。日本は平和で落ち着いた生活ができる、とても幸せな国だと思う。

でも、新聞やニュースでは、時々戦争やテロなどで大事件が起きたことを知らせる時がある。そんな国では、日本が戦争中にそうだったように、飛行機の音におびえたり、家族を失って悲しい思いをしている子がきつといるだろう。

「バタバタバターッ。」

と、飛んでくるヘリコプターが、だれかの命を助けるドクターヘリや、災害救助をするヘリコプターだったら。世界中のみんなが、飛行機やヘリコプターの音にびくびくしないで、空を見上げて、

「ガンバレー。」と言える世の中になればいいなあと、思う。

---

## ゾウと旅した戦争の冬

片浜小学校

6年

三 須 唯 華

私がこの本を読みたいと思ったきっかけは、今、日本でない戦争は、どのようなものだろう、人々はどのような暮らしを送っていたのだろうか、そのような事をもっともっと知ってみたいからです。今は、このくらしがふつうだと思っていただけ昔は、日本だけでなくちがう国もどのような苦勞をしていたのだろうという事が気になったからです。

次に、どのような場面が一番心に残ったかという、いつもと楽しい時間をすごしていたように感じ取れたけど、みんな、戦争の事を覚えていて、毎日、毎日を精いっぱい生きていた事が一番心に残りました。なぜ、心に残っていたかという、毎日を、精いっぱい生きていたので、昔だけ心から応えんをしたくなりました。また、自分と似ている所やちがう所は、自分はすぐ落ち込んでしまうけど、でもそれがどのようになったらいい方向に持っていけるかを考える所がっしょです。

本を読む前と後で自分の考え方が変わった事は、最初、戦争があると生きる事がいやになるのではないか、と思ったのですが、みんな、一日を楽しく生きているという事と、精いっぱいいやにならず生きている事が本を読むと必ずこの生活がふつうではない事が分かります。今の生活があるのも昔の人のおかげで、いろいろな物が今はふつうとなってしまうけど、戦争の時代はいつ何が起きるか分からないという事を感じました。昔は、一日一日を楽しく精いっぱい生きていました。今の私達は、今ある命がふつうだと思ってしまっている人も中にはいます。この本を通して私が思った事は、生まれてきた以上生きる権利があります。今でも戦争をしている国があるとしたら、とても悲しい事だと思います。どの国も笑いの絶えない国だといいなと思います。

---

## 真っ黒なおべんとう

片浜小学校

6年

村越奏斗

ぼくは、4年前の小学校2年生の夏休みに、家族で広島に旅行しました。そこで訪れた原爆資料館で原爆によって、真っ黒になったお弁当箱を見ました。とても食べ物とは思えない作り物のような黒色、そして70年以上たってもそのまま残っていることにびっくりしました。

しかし、それは当時、広島に原爆が落とされたというまぎれもない証拠なのです。ぼくはまだ小さかったけれど、今でも忘れられないほどのしょうげきを受けました。

ぼくは夏休みに「真っ黒なおべんとう」という本を読みました。本を見た時に、実物を見た時の記憶がよみがえってきたからです。

しげるは、ぼくと一歳しか変わらない中学校1年生です。それなのに、建物疎開のために働いていました。この建物疎開とは、空襲を受けた時に火事が広がらないように建物を壊しておく作業のことです。まだ中学1年生なのに国のために働くなんて、今のぼくたちには出来ないことなんだろうなと思いました。

しげるはお母さんが作ってくれたお弁当を食べる前に原爆の被害にあって死んでしまいました。そんなことを知らないしげるのお母さんは、必死にしげるをさがし回り、ようやく真っ黒になったお弁当箱をかかえたまま死んでいるしげるを見つけたのです。その時のお母さんの気持ちを考えると、ぼくは本当に悲しくなりました。

しげるのお母さんは、お弁当箱を原爆資料館に展示するのは嫌だったそうですが、戦争や原爆の証拠になるのならと言って貸してくれたそうです。そのおかげでぼく達は資料館で実際に見ることができました。本物を見たことをぼくは一生忘れないと思います。

ぼくは、お母さんが作ってくれるお弁当が大好きです。いつも学校では給食だけど、たまにお母さんのお弁当の日があるとすごくうれしいです。しげるもお母さんのお弁当を楽しみにしていたと思います。でも食べる前に死んでしまって本当にかわいそうだと思うし、悔しいです。

原爆は、赤ちゃんから老人までたくさんの人の命をうばいました。どこの国でも、もう絶対に使ってほしくないです。そして二度と戦争を起こしてほしくない強く思います。それと共に、日本に原爆が落とされたという事実も決して忘れてはいけないと思います。

---

## 祖父母の話を聞いて

金岡小学校

6年

井堀円花

私が祖父と祖母に話を聞きに行ったのは、広島原爆の日でした。祖父は、実際に原爆を受けたわけではありませんが、平和記念式典での小学生の作文の朗読を聞き、心に響いたようです。

私は、戦争を体験していません。それは、良いことです。しかし、戦争を体験していないということは、戦争の恐ろしさを知らないということです。今、戦争の恐ろしさを知っている人が少なくなっています。私は祖父と祖母に話を聞きましたが、今となってはあり得ないことが、たくさんありました。その恐ろしい出来事を、私の祖父と祖母が体験していることにとってもおどろきました。体験した本人から聞くと、とても生々しく、戦争はやってはいけないということが伝わってきました。

祖母は、小学生の時に樺太から引き揚げて来ました。生まれてから小学校低学年まで、樺太で過ごしていました。おだやかに暮らしていたある日、突然ロシア兵が機関銃を持ち、土足で家に上がり込んで来たり、引き揚げの時、いつ沈むかわからない船に乗ったり、怖くて辛い思いをしました。しかし、近所のロシア人は祖母の家族や周りの日本人の家族にとっても親切にしてくれたそうです。祖母は、

「国と国が争っていても、人と人は仲良くなれるんだよ。」  
と言っていました。私は、良かったと思いました。もちろん、戦争は良くないことです。しかし、祖母は、近所のロシア人の優しさから、戦争の不安の中でも小さな幸せを見つけることができたのだと思います。

祖父は、沼津で戦争を体験しました。祖父は、天皇陛下の写真を守る人でした。写真1枚の為に、祖父が命を落とそうとしていたと聞き、おどろきました。祖父が死んでしまっていたら、今、私の母や姉、私はいませんでした。

祖父は、  
「今が一番危ないんだよ。」  
と教えてくれました。戦争の恐ろしさを忘れ、平和の大切さを知る人がいなくなってきた。その状況が、今の世界に似ているなど、危機感を覚えました。

これから、私達が日本の未来を担っていきます。二度と戦争を起こさない為に、戦争の恐ろしさを知り、世界に伝えていくことが大切だと思います。

---

## 当たり前のことが実は幸せ

金岡小学校

6年

杉山大登

みなさんは空襲を知っていますか？国語辞典で調べてみると、「飛行機で空から地上をせめること。」と書いてあります。

ぼくは、今年 of 自由研究で自分の家系について調べました。杉山家の一代目、つまりぼくの曾祖父母は静岡市に住んでいたそうです。そして、1945年6月20日0時51分、静岡大空襲にあって家が全焼してしまったことを知りました。このことを知ったぼくはこんなことを思っていました。

(もしも自分の家がいつの間にか火事でなくなっていたなんてことがあったら信じられない.....それに自分の家だけではなくて街ごとなくなってしまうたら、たとえ命が助かったとしても死んだほうがマシと思ってしまうかもしれない.....)

正直こんなことウソであってほしいとも思いました。そんなこと望んでも無だなのはもちろん知っていました。それでも望まずにはいられませんでした。

この時ぼくは初めて戦争のおそろしさを知りました。

そしてぼくは、今の自分の生活の中に「平和」というものがどれだけあるのか考えてみることにしました。

例えば家があること、学校があること、街があること、家族がいること、こんな当たり前前がぼくは「平和」なんだと思います。

ぼくはこれからもこの「平和」というものが当たり前であり続けてほしいと心から願います。

---

## 平和を考える

大岡小学校

6年

夏井啓汰

ぼくは、戦争について、知りません。ずっと前に、「ほたるの墓」というアニメを、兄と一緒に見た時に、悲しいなあと思ってから、戦争について考えることをさけて来たのだと思います。しかし、8月15日に終戦記念日をむかえるので、真剣に考えてみようと思います。

戦争のきっかけは、1931年の満州事変です。日本がうそをつき、中国の線路を壊したことから始まりました。なぜ、うそをついてまで、外国の土地を手に入れようとしたのか、ぼくには全く考えられません。日本が太平洋戦争をしていた時、子供たちの夢は、戦争に行つて名よの戦死をすることでした。今のぼくたちみたいに、サッカー選手などの夢は無かつたそうです。ぼくは、国のために死ぬなんて考えられませんし、すぐに人生が終わってしまうことは絶対にいやです。

祖母に戦争の話聞きに行きましたが、祖母は、その時まだ2才だったので、ひいおじいさんに聞いた話を教えてくれました。ひいおじいさんは、畑を耕している時に、飛行機が飛んできたので、畑に寝そべって死んだふりを

して、通り過ぎるのを待っていたそうです。ぼくだったらどきどきして、怖くてじっとしてられないと思いました。ひいおじいさんは、自分の家の庭のおくに、防空ごうを作って家族全員が避難できるようにしたそうです。夜も飛行機が飛んでくるので、窓に黒い紙を貼って、明かりが外にもれないようにしたそうです。農家だったので、食べる物はありましたが、近所の人たちがお腹をすかせて苦しい思いをしているのに、自分たちだけぜいたくはできないと、いつも言っていたそうです。せっかく作ったお米を、ぬすまれてしまったこともあったそうです。今は、食べる物もたくさんあって、お腹がすいて苦しいということはないけど、この時は、食べたくても食べられなかったのだなあと思うと、おどろきました。

戦争は、人と人の殺し合いです。そんなことをしなくても、話し合いで解決ができるはずです。戦争の後にできた憲法で、日本は戦争ができなくなりました。核兵器も作れません。でも、あんなおそろしい物は、作ってはいけないと思います。戦争で核爆弾を落とされてしまった日本は、もう二度と戦争をくり返さないために、その体験を伝え続けていくべきだと思います。ぼくは、もしもこれから、戦争になりそうな時が来てしまったら、絶対に反対しようと心から思います。ぼくなら、まず外国と仲良くやってみて、無理な場合は、交換条件を出せばいいと思います。2020年には、東京オリンピックが開きませんが、競技の中でルールにもとづいて、競うことは良いと思います。全世界が、仲良く発展していければ、良いと思います。

---

## 小さな平和から大きな平和へ

愛鷹小学校

6年

遠藤友里

日本は今、いくつもの危機におそわれていると私は思う。例として一つ挙げるとしたら2度目の戦争が起こるかもしれないことだ。アメリカの大統領がトランプ大統領になってから、日本の総理はアメリカに行くようになり、アメリカと日本はとても仲良くなった。しかし北朝鮮とアメリカの仲は悪くなってしまい、とても不安になった。その時、もし戦争が起きたらどうなるかと思った。日本はアメリカと一緒に戦わなければならないのだ。70年前の戦争がくり返され、命が失われ、建物がこわされ貧しいくらしが始まり、人々から「戦争なんてやるんじゃなかった」と批判を受けてしまう。勝ったとしても、他の国との仲が悪くなり、貿易をしてももらえなくなってしまうかもしれない。もし貿易をしてももらえなかったら、日本は食料不足になってしまう。

さらにこんなことが長く続くと、日本は貧しい国になってしまう。結果的には、負けても勝っても同じだと思う。

だから私は戦争なんてきらい。やりたくないと思う。

沼津市は核兵器廃絶平和宣言都市だ。昭和62年3月に核兵器のない平和な世界を願って宣言された。これは、私たちが住んでいる沼津が胸を張って誇れることだと思う。

1998年インドとパキスタンで核実験をした時に、長崎の市民団体が地元の高校生をニューヨークの国連本部に送った。これが「高校生平和大使」と言われ、15の都道府県の20人が「平和の未来をつくろう」と核兵器廃絶と平和のために署名活動を行っている。今年のノーベル平和賞の正式候補だ。長年、平和活動を行ってきたのが世界に認められたのだと思う。もし、駅前で平和大使に会ったら、私は進んで署名したいと思う。

でも、残念なことがある。日本は核兵器禁止条約に反対してこの国際条約の会議に参加しなかったことである。昨年7月7日に国連に加盟する193国のうち122国が賛成だった。日本は広島や長崎に原爆を落とされた世界でただ一つの被爆国で多くの人々はその恐ろしさや悲しさを経験している。それなのに、この国際条約に賛成しなかったので怒りの声があった。私も、被爆国として賛成して、世界に強く訴えて欲しかった。

高校生たちの小さな平和運動が国連の大きな平和運動に広がってほしいと願っている。

祖母は、戦争中に生まれ茨城にそ開した。戦後の生活の大変さを幼心に覚えていて話をする。「日本は戦争に勝てるような国ではないのに戦争をして負けた。国民を苦しめた戦争をしなければよかった。」と言う。また、食事で前日の食べ残しを出された時、「昨日食べた」というと、「戦争や貧困で世界中には、お腹をすかせた子供たちが大勢いる。ぜいたくを言わない。」としかられる。「日本が、スイスのような永世中立国ならば良かった。今、世界中で戦争につながる小さな種がまかれているように感じる。この先、若者に不安をあたえないような世の中になって欲しい。」とも言っている。

この祖母の話聞いて、今の日本は平和で食べるものもあまり不自由ない。私たちは幸せだと思っている。今の時代を大切にして平和が長く続くように願っている。

---

## 特攻隊からのメッセージ

愛鷹小学校

6年

瀬戸雅紀

ぼくは、夏休みに、家族旅行で鹿児島へ行きました。そこで、知覧特攻平和会館へ行き特攻隊のことを初めて知りました。

平和会館では、特攻に行った人の写真や、家族や恋人への手紙などがあり、戦争のおそろしさ、特攻で亡くなった若者たちの悲しさ、家族への思いなどを感じました。ぼくは今まで、戦争とは、「殺し合いが怖い」「食べ物がなくて苦しい」と感じるくらいで戦争について深く考えたことがありませんで

した。でも、戦争とはもっとおそろしいものでした。人の命が一つ、また一つと次々に失われていくので、言葉に表せないほど、きょうふと悲しさでいっぱいになりました。特攻とは、そのおそろしさを物語っていました。敵の軍かんへ飛行機で体当たりして命が失われていきました。敵の軍かんまでたどりつけないまま亡くなってしまった人もたくさんいました。みんなそのような飛行機に乗りたくないはずです。それでもお国のために命を落としていったのです。

特攻隊の世話をしていたという人の息子さんのお話をうかがいました。その人のお母さんは、

「特攻へ行く人たちは、みんな笑顔だった」

と言っていたようです。ぼくはその人たちの笑顔があったから今、こうして平和で生きていると感じました。その時の日本は平和ということをおぼえていたと思います。家族や身近な人を亡くして悲しんでいる人や、食べ物がなくて苦しんでいる人など関係なく、ただひたすら戦争をし、多くの人を亡くし、悲しみや苦しみが広がっていきました。

「戦争は絶対にしてはいけない」ということを強く感じました。

今、日本は平和です。けれど、まだ戦争をしている国はあり、苦しんでいる人もたくさんいます。この世から戦争がなくなり、世界中の人々が平和で生きられる世の中にしていきたいです。そのためにも当時、戦争に行った人たちの思いを忘れずに、みんなが「戦争は絶対にしてはいけない」ということを常に感じる事が大切だと思います。

---

## 戦争のおそろしさ

大平小学校

4年

金 枝

暁

戦争が終わって73年たった。73年前というとずっとずうっと前のように思う。

終戦記念日に沖なわの102才のおばあさんがテレビにうつし出された。そのおばあさんは、若い時にだんなさんを沖なわ戦争で亡くされたようであった。

「もう73年？わたしは悲しくて悲しくてつらくてつらくて……。」

と、話されていた。おばあさんの記おくは、苦しい時のままのようだった。最愛のだんなさんを戦争でなくし73年。さぞかしつらい日々をすごしたことだろうと思う。

ぼくのひいおじいちゃんも若いころ戦争に行った。でも生きて帰られた。ぼくの親せきでは、19才と21才の若い男の人が戦争に行った。でも二人とも死んでしまった。戦争のことも戦争で亡くなった人たちのことも遠い遠い昔のこのように思っていた。でもあの沖なわのおばあさんの話を聞いて、あ

のおばあさんの中では戦争はまだ終わっていないように感じた。

もし、ぼくのひいおじいちゃんが戦争で死んでいたら、ぼくのおじいちゃんもお母さんも、ぼくだって今、生きてはいない。ぼくはひいおじいちゃんが生きて帰ってきてくれて本当によかったと思う。

ぼくは、今年の夏休みに広島平和記念資料館を見学した。そして原爆のおそろしさをまざまざと見せつけられた。たった1発の原子爆だんのせいで、何のつみもない人が一しゅんのうちに焼かれ殺された。今もなお、何十万人の人々が原爆の後いしょうで不自由な生活や病院生活を送っている。原爆が落とされて73年もたっているのにもかかわらず、苦しめられている。戦争は本当にむごい。残こくである。平和で楽しく生活している。人々の生活を、一しゅんにしてうばってしまう。やりたいことがあり、かなえたいゆめもあったらうに、全てうばいってしまう。

ぼくは広島で佐々木さだ子さんが2才の時にひ爆して11才の時に白血病にかかり、毎日毎日、薬の包み紙でつるを折り、千羽折れば病気が治るということをゆめみて必死に折り続け、1300羽折ったところで、とうとう命の終わりがきたという話を聞いて、むねがいたくなかった。11才といえばぼくと同じくらいの年齢である。原爆のせいで白血病という血えきのがんにおかされ、治ることをずっとゆめみて、つらい治りょうもしてきたと思う。わずか11才でゆめも希望も全てうばいとられた。

ぼくは平和な時代に生まれ、何不自由なく毎日を過ごしているが、この平和の世が来る前には多くの人々のぎせいがあったからだと思う。いつまでもいつまでも平和な世の中が続くことを願っている。

---

## 平和を考える

原小学校

4年

山本千聖

今、日本は、アメリカと戦争していないけれど、昔は多くの人が死んでしまいました。今は平和なのに、昔は親や子どもなど大勢の人が苦しんでかわいそうだと思いました。

今日、8月15日は、終戦記念日です。子ども新聞に戦争の体験談が書いてありました。東京に住んでいた星野さんは「東京大空しゅう」で両親と15才の兄と生後六カ月の妹を亡くしました。11才の星野さんは別の所にそかいしていたため無事でした。星野さんは戦争が終わっても毎日がつらかったから、何も感じなかったそうです。戦争で私のような経験をすることがないように、平和のために、自分のことだけでなく、まわりの人のことを考えられる人になってほしいと星野さんは願っていました。また別の新聞には、「焼き場に立つ少年」の写真がのっていました。おばあちゃんに聞いた話によると、亡くなった弟を背負い、直立不動の姿勢で立つ少年の姿を収めたものだそうで

す。この写真は、少年が死体を焼く順番をくちびるをぎゅっとかみしめて待っている悲しい写真です。ぼくは、戦争は本当に残こくだと思いました。

核は、広島、長崎に落ちました。合わせて20万人以上が亡くなりました。また現在まででは60万人以上が亡くなったと言われています。日本は、核を持っていませんが、世界では9の国が持っていて、核の数の九割がロシアとアメリカです。核は日本に落ちてから70年以上戦争に使われていません。しかし今世界に14500発あります。これらが戦争に使われた場合、地球はほろんでしまいます。ぼくはものすごくはかい力のある核を使わないのに、なぜ作るのか疑問に思いました。

今も世界では民族や国境の問題などによって紛争がおきています。これによってたくさんの方が食べるものもなく、住む所もなく苦しんでいます。ぼくは平和な場所に生まれて良かったです。ぼくは周りの人とはけんかなどしないで仲良くしていきたいです。相手を思いやる気持ちがあれば平和でいられると思うからです。

戦争の残こくさや悲さんな話を知って、今ぼくは戦争が人の命をどれだけうばうか、どれだけたくさん悲しみがあるかわかりました。ぼくは、戦争を忘れないようにしたいです。

---

## 平和への願い

香貫小学校

5年

田代 紗千

8月6日。朝、テレビをつけると、広島での平和記念式典の映像が流れていました。そこには、総理大臣や海外の人がたくさん映っていました。お母さんに

「今日は何の日なの？」

と聞いてみました。すると、

「今日は73年前に広島に原爆が落とされた日だよ。」

と教えてくれました。一つの爆だんで14万人の命がうばわれてしまったそうです。

私は、平和への誓いをしていた小学生の言葉がとても心に残りました。

平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、夢や希望をもてる未来があること。

私はこれを普通のことだと思っていました。でも、73年前はこれができなかったのです。その時代に生きていた人たちの気持ちを考えると悲しくなりました。

夏休み、私はおじいちゃんの家へ行きました。私は戦争のことについて聞いてみました。

「おじいちゃんは戦争後の昭和22年に産まれたから、戦争を直接は体験していないけど、戦争後日本が貧しかった時代は知っているよ。」

と教えてくれました。

小学生のころはお父さんが戦争で死んでしまい、食料も少なく小学校に通えない子もたくさんいたそうです。

「家族はとても辛かったね。」

と私が言うと、

「国が決めたことをきかないで戦争に行きたくないとは言えなかったんだ。だから家族も悲しいけれどあきらめるしかなかったんだと思うよ。」

とおじいちゃんは言いました。

戦争によって、戦地に行く人も家族もあきらめないといけないことがたくさんあったんだと思います。

「それから、これ。」

と、おじいちゃんが引き出しから取り出したものは深緑の布でおおわれた小さな手帳でした。表紙には『軍隊手帳』と書かれていました。中にはびっしりと出兵記録が書かれていました。

「これはひいおじいちゃんが戦争に行っていた時のものだよ。ひいおじいちゃんは20才から戦争に行って運良く帰ってこられたけど、たくさんの仲間が亡くなったそうだよ。」

実物をさわったのは初めてなので、こんな身近に戦争に行っていた人がいたことに私はとてもおどろきました。

戦争は、一人一人の生活を大きく変えてしまうものだと思います。戦争に未来はありません。

日本が世界でただ一つの被爆国ということも知りませんでした。これから先、地球上で核兵器が使われることがないように、戦争によって命を落とす人が一人もなくなるように、世界中の人たちに日本の戦争のことを伝えていきたいと思いました。

---

## 命は一つしかない

西浦小学校

6年

葛野

翔

えらい人の一言で国、世界は大きく変わる。1945年、アメリカ兵が沖縄に上陸した。それから沖縄の人々の笑顔が無くなった。アメリカは、沖縄の中部の西海岸から攻めていった。そして、沖縄の南の方へ攻めた。次々に、人が死んでいく。人々は、抵抗も反撃もなく、逃げることも出来ない。

南の方には、沖縄師範学校女子部があった。ひめゆりの生徒はいつもどおり勉強、訓練をしていた。だが、アメリカ兵の攻撃で、けがや、死んでしまった人の世話をし始めた。ひめゆりの生徒は夜中も手当てに追われ、ねるひ

まがなかった。たくさんの人の手足を切ったり、ますいなしの手術をしたりと、ひめゆりの生徒たちは日夜がんばった。けがをしている人は、助けてとさけぶしかなかった。急いで治りょうをしても、手が足りなかった。今で言ったら医者の仕事。まさに命がけだった。かん者の治りょうをしていた六月十八日に解散命令が言い渡された。これからひめゆりの生徒は、自分の判断で行動することになった。でも、アメリカ軍の攻撃を逃れることができず、多くの生徒の命が失われていった。沖縄でたくさんの人の命が失われた。死んでいった人はとても残こくな死に方。苦しみながら死ぬ人がほとんどだった。手りゅう弾を胸にあて爆発させる者、行き場を失い、海岸で大波にのまれる人。想像するだけでとても苦しい気持ちになる。こんな死に方はいやだ。長く生きて、いろいろなことをしたいと思う人がほとんどだと思う。やっぱり死ぬのは怖い。でも死ねないで苦しんでいる人もいた。アメリカ兵につかまるくらいならと思いで死ぬ人もいた。この時の沖縄には笑顔、幸せというものが無かった。それだけは、ぼくにもわかった。

ぼくは、実際にひめゆり平和祈念資料館に行ってみた。景色はとてもきれいだった。でも、資料館に入るとふん囲気が変わった。そのころには、平和というものが無かったと知った。資料館の中へ進めば進むほど心がいたくなる。資料館に入っている人も笑顔はなかった。泣いている人もいた。それだけこの争いは辛いことだったということだと思う。

今の日本は平和だ。平和なことが一番楽しいし、幸せ。みんながみんな笑顔でいることが一番幸せだとぼくは心からそう思う。命は一つしかない。命より大切な物はない。もうこのような争いは、2度とおこらないでほしい。人はこんな死に方をしてはいけない。なぜなら平和で、みんなが笑って、仲良くしていることが一番大切で幸せだと思うからだ。

---

## 平和

門池小学校

6年

河村康陽

「原爆は、もう使っちゃいけない。」

ぼくは、この一言から原爆などに興味を持った。本やインターネットで原爆のことについて調べていくと、ぼくはだんだん広島に行ってみたくなった。

今年の夏、ぼくは広島に行くことができた。ぼくは広島に行き、原爆の恐ろしさ、怖さを改めて知ることができた。

「原爆は、死。」

と、ぼくは言われた。8月6日のあの日、戦争がなければ、何十万人もぎせいにならず、おだやかな生活を送ることができたのではないかとぼくは思う。しかし、原爆が落とされ、出かけている子どもも、母親と一緒に赤ちゃんも、学校にいる子どももほとんどが原爆で死んでしまった。もし、戦争に勝った

らどうだっただろうか。多分すごく喜んだと思う。しかし、自分たちがもし、アメリカ側だったらどうだろうか。それでもみんな喜ぶだろうか。戦争は戦った人も死んでいき、戦わなかった人も死んでいってしまう。「原爆は、死。」という言葉は、原爆も戦争も死を示していることをみんなに知ってほしいという思いが込められているのだと、ぼくは感じた。

原爆は人を苦しませ、家族や町までうばい取る。原爆で命を落とすだけでなく、後遺症をわずらい、人生をくるわされ苦しみながら死んでいく人もいる。原爆は人の全てをうばい取ってしまうのである。でも、世の中には原爆よりもっとい力のある爆弾も存在する。なんて怖い世の中なんだと感じた。

戦争や核兵器は、もう2度と使ってはいけない。ぼくは広島に行ってみて、原爆で命を落とした人、人生をくるわされた人の無念な思いを感じてきた。人の命が多くうばわれてしまったことを切なく感じる。

広島は今、あの8月6日とちがって、『平和』を示す場所だ。多くの人が広島に行き、原爆の恐ろしさ、そして、平和のありがたさを知ってほしい。

---

## 平和って何だろう？

門池小学校

6年

花田優愛

「平和って何だろう？」

おじいちゃんに聞いてみた。

「それは今、毎日普通に学校へ行って、毎日ご飯を食べて、遊んで、ねることが出来る。それこそが平和ってことだよ。」

と言った。

「え？ それが何で平和なの？ 当たり前のことじゃん。」

と私が言った。

「戦争とは一体何だろう。」

戦争の資料を見ていたら、それは国と国が争い、人の命など、虫けらのように殺人をくり返していたことにおどろいた。

なんでこんなことができるのだろうか。しかも国民全員が同じ考えを持って、戦いの道へ進んでいく。なぜ。何のために。私にはよく分からない。その先に、何があるのだろうか。

おじいちゃんのお父さんやお母さんは、子どものころ、空しゅう警報というサイレンが鳴って、家族みんなで防空ごうというほら穴ににげ、震えながら生活をしていただけだと聞いた。空しゅう警報とは、アメリカ軍の飛行機が日本に爆弾をたくさん落としていくことを知らせる警報である。おじいちゃんのお父さんお母さんも、にげる時に友達が何人も死んでいってしまった経験があるそうだ。毎日、いつ警報が鳴るか分からない。食料も少ししかなく、今の私には、そんな不安な生活はたえられないだろう。

この戦争は、70年前のことだと知った。さらに詳しく調べてみると、広島や長崎、沖なわなど、日本中には今でも戦争の苦しみを抱えながら生活をしている人がたくさんいることを知った。こんなに長い年月がたっても苦しむ人がいるなんて、戦争は2度と起こしてはいけないことだと思った。

ところが今、世界の中では戦争をしている国があるそうだ。その国の子どもたちはどんな生活をしているのだろうか。早く全ての戦争がなくなればいいと思う。

今、普通に生活できていること。それがどれだけ幸せなことなのか分かった気がする。平和とは、今みんなと普段どおり笑っていられること。このことを忘れず、日々の生活に感謝し、生きていきたい。

---

## おそろいせんそう

原東小学校

4年

西澤成龍

ぼくは夏休みにせんそうに関する本を2さつ図書館からかりて来ました。なぜかという、毎年夏になるとせんそうの事がテレビや新聞などで放送されていて知りたくなかったからです。

二さつの本を読んでいると中からなみだがじわっと出てきてなかなか読み終わる事ができませんでした。読み終わった後も、しばらくなみだが止まりませんでした。

「これからせんそうはおこらないかな。一生おこらないといいな。」  
と思わず声に出してしまいました。

かりた本の中に、いくつかひばく体けんが書かれていて、その中で心のこった場面があります。こわれた家の下じきになったお母さんを、通りかかる大人に声をかけて助けてもらってもびくともしないで、やがて火さいがおこってお母さんが生きることの大切さについて「あなたは生きのこってしっかり勉強してりっぱな大人になりなさい」と言った場面です。もし、ぼくがその立場だったらどうしたんだろうと考えましたが答えが出ませんでした。こんな思いを本当にしたくないので、せんそうはない方がいいと思いました。

今、日本ではせんそうはおきてはいませんが、世界ではせんそうをしているところがあるということを知りました。何もつみのない人がまきこまれてなくなっているのかと思うと悲しくてくやしいです。世界中でせんそうのない時代になってほしいと思います。ぼくは、今の毎日にかんしゃしながら生きていかないと思いました。

---